

## ピリピ人への手紙4章「愛し慕う兄弟たち」

### 1A 平和の神 1-9

1B 協力の勧め 1-3

2B 主にある喜び 4-7

3B 良きことへの留意 8-9

### 2A 苦難を分け合う人々 10-20

1B 境遇に対処する秘訣 10-14

2B 霊的な口座 15-17

3B 豊かに満たす神 18-20

### 3A 聖徒たちの挨拶 21-23

## 本文

ピリピ人への手紙4章を開いてください。今日は、手紙の最後の部分、挨拶のところまで読んでいきます。パウロは、これまで書いてきたことを元にして、ピリピの教会にいる人々に対して、兄弟としての深い愛情をもって呼びかけ、また勧めています。彼らにとってパウロは使徒ではありますが、それ以上に互いに兄弟としての交わりが深くありました。それで、愛し慕う兄弟たちと呼びかけて、これまで教えてきたことを行うように呼びかけています。言い換えると、4章にある具体的なことをエパフロディトから聞いたので、この手紙を書いたと言ってもいいでしょう。

### 1A 平和の神 1-9

1B 協力の勧め 1-3

<sup>1a</sup> ですから、私の愛し慕う兄弟たち、私の喜び、冠よ。このように主にあって堅く立ってください。愛する者たち。

兄弟として、愛し慕う関係ができることは、本当に幸せですね。事実、私たちは神から生まれた者たちであり、キリストにあって兄弟ですから。パウロが冒頭で、「1:8 私がキリスト・イエスの愛の心をもって、どんなにあなたがたすべてを慕っているか、その証しをしてくださるのは神です。」と書いていました。そして、「私の喜び、冠よ」と呼んでいます。これは、主が天から降りて来られた時に、それぞれの者はその働きに応じて報いを受けます。その時に、聖霊の実を結ばせている彼ら自体が、主の前でパウロにとっての報いとなります。「よくやった、忠実なしもべだ」と、主人であるイエス様に評価される基となるのです。テサロニケの人たちに、パウロがこう言っています。「Iテサ2:19 私たちの主イエスが再び来られるとき、御前で私たちの望み、喜び、誇りの冠となるのは、いったいどれでしょうか。あなたがたではありませんか。」これが、福音の働き人にある最も大きな喜び、原動力ですね。人が主にあって育ち、実を結んでいることを見る時、ああ、いろいろな労苦

があるけれども、これこそが報いだと思うのです。

そして、「このように主にあって堅く立ってください。」ということですが、これは、1章27節以降にパウロが言ったことに戻るのです。「1:27 ただキリストの福音にふさわしく生活しなさい。そうすれば、私が行ってあなたがたに会うにしても、離れているにしても、あなたがたについて、こう聞くことができるでしょう。あなたがたは霊を一つにして堅く立ち、福音の信仰のために心を一つにしてともに戦っていて、28a どんなことがあっても、反対者たちに脅かされることはない、と。」

ここの、「ただキリストの福音にふさわしく生活しなさい」というのは、訳し変えると、「もっぱら御国の市民として生活しなさい」と訳せることを、以前の学びでお話ししました。ピリピは植民都市で、ローマから離れているけれども、ローマ市民としての誇りを持っていいます。敵に対して、命をもいとわず私たちは戦います、という愛国心がとても強かったのです。現に、植民都市には退役軍人が多く住んでいます。しかし、あなたがたは御国の市民である、ということです。天の御国の市民であり、あなたがたはキリストのゆえに戦っている同志なのだということです。だから、しっかりと堅く立ちなさい。霊を一つにして、心を一つにして戦いなさいと勧めています。それで、直前の3章20節に、「私たちの国籍は天にあります。」とあるのです。

私たちの生活にも、世の流れというものがあります。そして、教会内部にも、世の流れが入ってくるような教えや考えが入ってきます。3章では、パウロは両極端の教えに警戒することを教えました。一方は律法主義で、もう一方は心の欲するままに生きなさいという無律法主義です。このように信仰の戦いがあるのだから、私たちは主にしっかりと立っていないといけないのです。

<sup>2</sup>ユウオディアに勧め、シンティケに勧めます。あなたがたは、主にあって同じ思いになってください。

この一言に、パウロがこの手紙を書いている時の背景をうかがい知ることができます。彼女たちが意見を対立させていたのです。教会の人々はどちらに付くべきなのか迷ったことでしょう。せっかく教会のために労している二人が、意見を先鋭化させて対立しているのですから。パウロは、どちらが正しいのかということではなく、「主にあって同じ思いになってください」という勧めをしました。

おそらく、彼女たちは、ピリピの教会で初めに救われた人々なのかもしれません。パウロが初めてピリピに来た時に、「使徒 16:13 祈り場があると思われた川岸に行き、そこに腰を下ろして、集まって来た女たちに話をした。」とあります。彼は、新しい町に来ると、ユダヤ人の会堂に入って福音を宣べ伝えましたが、その町には会堂がありませんでした。当時、ユダヤ人の大人の男性が十名に満たないと、会堂を建てることはできませんでした。十名もユダヤ人の成年男子がいなかったのです。女性たちが川岸に集まっていた。その中の一人が、ティアティア市の紫布の商人でリディアが主を信じました。彼女が初穂ですが、そこにいた女たちに、ユウオディアとシンティケがいた

のかもしれませんが。

おそらく、彼女たちは教会の建て上げの初めから福音のために労していた働き人だったのでしょ  
う。次の3節で、二人はパウロと一緒に福音のために戦ってきたとあるからです。しかし、これまで  
ずっと迫害や困難があり、経済的にも窮して、そうした圧迫の中で、どうしてこんなことになっ  
ているのだろうか？という思いになっていたのかもしれませんが。それで、教会のこういったところが  
間違っていたとか、原因探しをしていたのかもしれませんが。またこうやったらよいのだという方法論  
も語っていたのかもしれませんが。その中で、心は一つなのですが、思いがばらばらで、意見が対立  
していたのでしょう。しかし、パウロは、何をすべきかとか、どうしてこうなったのかという原因探し  
ではなく、その苦しみをキリストの恵みなのだよと、1章の最後のところで話しています。苦しみ  
は、キリストにある恵みであり、そこに原因を探する必要はないのです。

<sup>3</sup> そうです、真の協力者よ、あなたにもお願いします。彼女たちを助けてあげてください。この人た  
ちは、いのちの書に名が記されているクレメンスやそのほかの私の同労者たちとともに、福音のため  
に私と一緒に戦ったのです。

意見の対立の他に、もう一つ問題があったようです。教会が困難を経ているのに、協力できる人  
が協力していなかったようです。「真の協力者よ、あなたにもお願いします」と呼びかけていますね。  
こちらは実名を出していません、ただ、真の協力者とだけ呼んでいます。おそらく、そういったら分  
かる人たちには分かるのでしょう。そしてその人が、二人を助けていなかったのです。パウロは、2  
章 21 節で、「みな自分自身のことを求めていて、イエス・キリストのことを求めてはいません。」と  
言っています。この人は教会の働きの中核にいたのでしょうか、一歩引いて、自分自身のことを求  
めていたのかもしれませんが。

そして、この「真の協力者」と呼ばれている人は、クレメンスという人を知っていたようです。クレメ  
ンスだけでなく、ほかにもパウロの同労者がいましたが、彼らが「いのちの書に名が記されている」  
と言っています。これは、聖書全体に書かれていることで、主ご自身にご自分が救われる名を記し  
ている、書物があるということです。いわゆる、住民票のようなものが当時ありました。住民登録し  
てあり、名が記されています。それと同じように、主ご自身のところに名を記された書物があります。  
モーセが、民のために執り成している時に、この書物のことを言及しましたね(出エジプト 32:32)。  
そしてイエス様が、悪霊追い出しをして戻って来た弟子たちに、天にあなたがたの名が書き記され  
ていることを喜びなさいと言われました(ルカ 10:20)。そして、黙示録には数多く、子羊のいのちの  
書について、言及されています。

つまり、対立したり、距離を取って無関心になっても、あなたがたは同じ住民なのだよ、天の御  
国の住民なのだよと問いかけているのです。天において永遠に生きるのに、そこで仲違いできま

すか？そこで、距離を置くんですか？ということです。

## 2B 主にある喜び 4-7

<sup>4</sup>いつも主にあって喜びなさい。もう一度言います。喜びなさい。

パウロは、改めて主にあって喜ぶことを勧めています。そして、「喜びなさい。」と命じていますね。ここから分かることは、喜ぶことは選択だということです。喜ぶ気持ちになるのではなく、喜ぶことを選び取るのです。彼女たちやその他の人たちが、今、困難なことや、否定的なことが目に見えているけれども、霊的には主が大いなる働きを、たった今、してくださっているのです。親衛隊の中で、福音が広がっていることを、パウロは手紙の初めに書きました。そして、ローマとその周りでは強打たちが勇気を得て、困難や反対があっても大胆に福音を語り始めました。その霊的眞実に気づいてほしいのです。いや、気づいているのではないのでしょうか。だから、こちらのほうに、喜ぶべき主の働きに目を留めることをしていきなさい、と命じているのです。

私たちも、自分の問題を見て、それで主の働きに目が閉ざされていることがあるかもしれません。それで、主の働きがあるのにそこに関わらないでいるかもしれません。しかし、主が確実に、今、私たちを運んでおられることを認めて、喜ぶのです。

<sup>5</sup>あなたがたの寛容な心が、すべての人に知られるようにしなさい。主は近いのです。

主にあって喜ぶ中には、キリストを中心にした御国が広がっています。パウロは、自分のことを妬んで、彼を貶める形で福音を伝えている者たちの存在を知っていました。けれども、それにもかかわらず、キリストが宣べ伝えられているのだから喜びます、と書いていました。ここにある、寛容な心なのです。主は、否定的なことをも用いられて、ご自分の働きをするのです。そのところを見ていれば、私たちは自分の思いに合わない人々がいても、それでも、キリストの御名が広がっているのを見て、そちらのほうを喜んでいられるのです。ですから、寛容に自ずとなっていくのです。

そして、「すべての人に知られるようにしなさい」と書いています。これは、言い換えれば、自分の世界の中に閉じこもってはいけないということです。自分の考えがあって、その周りに壁を設けて、自分の中に留まっていたはいけないということです。キリストのからだの中に、自分を知られていくようにしなさい、ということです。他のキリスト者との交わりを拒んで、自分のことを誰も知らない、ごく少数の人しか知らないようにしてはいけません。同じ教会の人たちでさえ、「ええ、あの人についてはいくちも知りません。」ということであっては、ならないのです。

また、分派的な動きをしたり、対立的なことをする人は、他のいろいろな人たちとの関わりを断ちます。いっしょにいても、ごく小さな、気の合う仲だけです。けれども、その気の合う仲においても、

もちろん意見の違いがありますから、再び、その小さな仲間の中で意見の激しい対立によって分裂します。分裂から分裂、しまいには自分だけになってしまうのです。私たちは、キリストの御名によって集まる人々の中に、自分もいるのだということを知って、そこに知られているようにしないとイケないのです。

「主は近いのです。」と、パウロは言っています。主が来られるのが近いということです。ヤコブは手紙の中で、「5:9 兄弟たち。さばかれることがないように、互いに文句を言い合うのはやめなさい。見なさい。さばきを行う方が戸口のところに立っておられます。」と言いました。主が近づいているということは、キリストの御国が迫っているということです。大きな祝宴が近づいているということです。そこで、人々がその平和の中で、神の豊かさに酔いしれる時なのです。そういった時が近づいているのに、心を閉ざして相手を受け入れないようなことがあってはならない、ということです。むしろ、主が大きな収穫をしておられる中にあるのだから、心を福音のゆえに全ての人に開く、ということに他なりません。

<sup>6</sup> 何も思い煩わないで、あらゆる場合に、感謝をもってささげる祈りと願いによって、あなたがたの願い事を神に知っていただきなさい。<sup>7</sup> そうすれば、すべての理解を超えた神の平安が、あなたがたの心と思いをキリスト・イエスにあって守ってくれます。

主にあって喜ぶ世界には、主ご自身があらゆるものを使って、ご自分のみことばが広がるようにされているということを知りました。主は、私たちの思いをはるかに超えて、事を行われているからです。その神には平和があります。秩序があります。安心があります。豊かさがあります。ですから、私たちがすることは、一つに思い煩わないことです。そして次に、感謝と共に献げる祈りと願いによって、願いを神に知っていただくことです。そうすれば、たとえ今の状況が理解できなくとも、その理解を超えたところにある神の平安が、私たちの思いと心を守ってくれます。午前礼拝で、この箇所をじっくりと見てきたので、ぜひ後で聞いてください。

### 3B 良きことへの留意 8-9

<sup>8</sup> 最後に、兄弟たち。すべて真実なこと、すべて尊ぶべきこと、すべて正しいこと、すべて清いこと、すべて愛すべきこと、すべて評判の良いことに、また、何か徳とされることや称賛に値することがあれば、そのようなことに心を留めなさい。

パウロは、続けて、思いや心について、そして平和について語っています。平和の神がおられるところには、ここに書かれているようなあらゆる尊ぶべきことがあります。ヤコブも手紙の中で、上からの知恵として、平和と共に次の特徴を挙げています。「3:17-18 しかし、上からの知恵は、まず第一に清いものです。それから、平和で、優しく、協調性があり、あわれみと良い実に満ち、偏見がなく、偽善もありません。18 義の実を結ばせる種は、平和をつくる人々によって平和のうちに

蒔かれるのです。」

7 節で読んだように、心と思いが、思い煩いを捨てて、主に感謝と共に祈り願うことによって守られますが、私たちが、思いと心をしっかりと働かせて、個々に列挙されていることを能動的に取り上げていく必要があります。「すべて」という言葉を使っていますね、主から出てきているこれらの良きものを、逃すことなく、すべて取って来て、それを心に留めていくようにしなさい、というのです。

みなさんは、日記とか書かれていますでしょうか？言葉で表現して、きちんと文章にすると、心に留められるかもしれませんね。また、今の時代、ブログ記事に書いたり、SNS に書いたりするのも良い訓練でしょう。終わった後に、互いに分かち合ってもよいでしょう。LINE でやり取りしてもいいかもしれません。私は、礼拝が終わると、その一日の様子を書き留めます。パウロが言ったように、尊ぶべきこと、愛すべきこと、徳とされることなどを書きますね。それらを見返したら、ああ、主がこのようにしてくださったのだと思い起こすこともできます。

そうすると、私たちは、たとえいろんなことが起こっても、ああ、主がなされていることだ、アーメン！とすることができますね。そして、みなが思いを一つにして、そのことに同意できます。だれが、これらのことを願わないでしょうか？これが平和の神の働きです。世においては、そうではないものが満ちています。例えば、夫婦の仲が悪い、不倫をしている、離婚をしたとかいう話はいっぱい出てきます。でも、「老夫婦になっても、手をつないで散歩している」姿を見たら、だれでもいいよね！となります。同じように、福音の信仰について、良きことに心を留めてほしいと、パウロは、ピリピの教会の働き人たちに願っています。

<sup>9</sup> あなたがたが私から学んだこと、受けたこと、聞いたこと、見たことを行いなさい。そうすれば、平和の神があなたがたとともにいてくださいます。

パウロは、すでに自分たちを手本にしてくださいと、彼らにお願いしていました(3:17)。キリストにある生き方を、パウロたちは彼らの前で見せていました。そこから彼らは学ぶことができました。しかし今、パウロが離れているので、その手本から少し離れていっていました。それで、もう一度、その基本に戻ってほしいと願っています。

ところで、彼は、2 章 12 節で、「あなたがたがいつも従順であったように、私がともにいるときだけでなく、私がいらない今はなおさら従順になり、恐れおののいて自分の救いを達成するよう努めなさい。」と言っていましたね。ただ受けるだけでなく、主から受けたものを出す必要があります。たくさんものを学んだら、それを受け取って、行っていく必要があります。そうすることによって、主が私たちの内で行われている良きこと、私たちの間で始まっている良きわざが、私たちを通して実現していくからです。主が、私たちの間で生きて働いてくださいます。それで、パウロたちが見せてい

た手本を行いなさいと勧めているのです。

ここで、「学ぶ」だけでなく「受ける」と続けて書いていあることに注意してください。学ぶだけでなく、受け入れるのです。学んでいるけれども、受け入れていないことがあります。それは、その人の行ないの実を見れば、明らかです。そして、「聞く」だけでなく、「見た」とも言っています。ただ聞いているだけでは、分からないことが多いのです。聞いているのは言葉であり概念であります。生きていることそのものになるためには、「見る」が必要です。ですから、パウロは、彼らの間に住みました。そしてどう生きるべきかを見てもらっていました。このようにして、私たちは他の仲間に、自分のことを知ってもらうことが互いに必要なのです。そうやって、見ることによって、互いに学ぶことができ、そして実践ができるのです。

そして、約束が「平和の神があなたがたとともにいてくださいます」とあります。神の平安が心と思いにあるだけでなく、平和の神が共にいてくださいます。平和というのは、単に争いがないということではありません。聖書では、全きこと、完全なことと、平和が深く関わっています。ヘブル語では、平和はシャローム、完全がシャレムです。互いに密接に関係する言葉なのです。完全なことというのが、何も間違っていないという意味だと思いがちですが、そうではなく、「すべて整っている、調和している」という意味合いがあります。人と人の調和、神のみこころと人との調和です。ですから、平和であるというのが神の全き姿を示しているのです。

## **2A 苦難を分け合う人々 10-20**

ここまでが、同じ思いについてのパウロの教えでした。そして10節からは、パウロが1章にて毛言及した、彼らがパウロの福音の働きを助ける贈り物について語ります。「1:5 あなたがたが最初の日から今日まで、福音を伝えることにともに携わってきたことを感謝しています。」と言っていましたね。神が、彼らにこの良き働きを始めてくださった。キリスト・イエスの日までにそれを完成させてくださることを確信する、とも言いました。10節に、この良い働きの具体的なことが書かれています。

### **1B 境遇に対処する秘訣 10-14**

<sup>10</sup> 私を案じてくれるあなたがたの心が、今ついによみがえってきたことを、私は主にあって大いに喜んでいます。あなたがたは案じてくれていたのですが、それを示す機会がなかったのです。

これは何を指しているかと言いますと、パウロがローマにいて、しかも牢にいたということが、ようやくピリピに伝わったことを意味します。彼らは機会があれば、パウロの働きを支えるための贈り物をしていたのですが、パウロがどこにいるのか、その消息がつかめなくなっていました。使徒の働きを見れば、エルサレムで騒動が起こって、彼はカイサリアに幽閉されました。それから、囚人たちが運ばれる船に乗って、危うく遭難して死にそうになり、けれども主の交じりで、マルタ島に着きました。それから、しばらくしてイタリア半島に渡り、そしてローマに着いたのです。このことが、ピ

リピの人たちには伝わっていなかったのですが、ようやく伝わったので、彼らにパウロを案じる心がよみがえって、それで送ってきたのです。パウロは、そのことを素直に喜んでいました。

<sup>11</sup> 乏しいからこう言うのではありません。私は、どんな境遇にあっても満足することを学びました。

ここからパウロは、金銭について、誤解を受けないように大事なことを語っていきます。「乏しいからこう言うのではありません。」と断っています。教会において、お金が足りないから献金しなさいという単純なことでは全くないのだということです。大前提に、私たちの神は豊かな方であり、私たちの必要を満たすことのできる方なのだということを言うことができます。けれども、神は、ご自身の御子を私たちに与えられたように、与えるということ、分け与えるということに多大な関心を持っておられます。強いみこころがあります。そこで、私たちに献げることを命じられるのです。自分の財産の一部を分け与えるのですが、そこに神がご介入されて、霊的な実を結ばせるのです。事欠いている人が、余っている人から与えられるということだけでは決して終わらない、神の霊的な働きが生まれることを覚えたいものです。

そこで、彼がまず語っているのは、「どんな境遇にあっても満足することを学びました」ということです。学びました、と言っているように、彼は初めから分かっていたわけではありません。いろいろな境遇にあって、そこで満ち足りることを知るようになったということです。そして、その満足が、お金が足りないという焦燥感から自分を守っています。テモテ第一で、こう教えています。「6:8-9 衣食があれば、それで満足すべきです。金持ちになりたがる人たちは、誘惑と罠と、また人を滅びと破滅に沈める、愚かで有害な多くの欲望に陥ります。」

<sup>12</sup> 私は、貧しくあることも知っており、富むことも知っています。満ち足りることに、飢えることに、富むことに乏しいことに、ありとあらゆる境遇に対処する秘訣を心得ています。

これは、金銭について、自分自身が支配できている、自由になっていることを心得ている証しです。金銭には力があります。私たちの生活を支配する力を持っています。ですから、かつてマモンという神として拝まれていました。イエス様が、こう言われました。「マタ 6:24 だれも二人の主人に仕えることはできません。一方を憎んで他方を愛することになるか、一方を重んじて他方を軽んじることになります。あなたがたは神と富とに仕えることはできません。」これほど、富は力のあるものなので、箴言には、アグルという人が祈りを献げています。「箴 30:7-9 二つのことをあなたにお願いします。私が死なないうちに、それをかなえてください。8 むなしいことと偽りのことばを、私から遠ざけてください。貧しさも富も私に与えず、ただ、私に定められた分の食物で、私を養ってください。9 私が満腹してあなたを否み、「【主】とはだれだ」と言わないように。また、私が貧しくなって盗みをし、私の神の御名を汚すことのないように。」

しばしば言われることですが、宝くじで高額当選した人は、その後で不幸が待っているということです。ある銀行では、当選者を別室に連れて行き、そして「【その日】から読む本」というものを渡されるそうです。なぜなら、不幸がその日から始まるからです。大抵、家族や親戚とのトラブルがまず始まります。そして散財します。結局、自分が当選する前と同じか、それ以下の生活に堕ちていきます。もちろん、そうならない人たちもいます。興味深いのは、生活水準を変えていない人です。自分が、お金の支配されないで生きていける水準は、もちろん今の所得水準が最も慣れていますが、それを引き上げもせず、引き下げもしないから、お金の左右されません。

パウロの場合は、宝くじではなく、福音宣教の働きにおいて、貧しくなった時もありました。富む時というのは、どういう時なのか分かりませんが、彼がカイサリアに幽閉されていた時に、総督フェリクスが、何度も彼を呼び出していました。それは、「パウロから金をもらいたい下心があった」とあります(使徒 24:26)。どういった時にも、彼は臨機応変に対処する秘訣を心得ていました。

<sup>13</sup> 私を強くしてくださる方によって、私はどんなことでもできるのです。

この箇所を、前後関係を見捨て、可能性思考のようにとらえる人たちがいます。主によって私は何でもできる、超人的な力を得てどんなことにも対処できると受けとめるのです。そうではありません、むしろ、あらゆる境遇の中で、それでも主に命じられたことを行なう力のことを指しています。

パウロは、今、牢獄にいます。彼にできないことは、たくさんあります。しかし、どうでしょうか、彼は自由でした。「使徒 28:31 少しもはばかりことなく、また妨げられることもなく、神の国を宣べ伝え、主イエス・キリストのことを教えた。」とあります。鎖につながれている人が、どうしてそのようなことが言えたのか？まず、鎖につながれている兵士に対して福音を伝えました。そして彼は物理的に外に出ることはできませんが、主ご自身が人々を彼のところに連れてきてくださいます。パウロは、周りの環境によって自分が左右されることのないよう、主にあって支配する心得がありました。それで主の命令を守ることに集中できたのです。

私が今でも鮮明に覚えている会話があります。ある仲良くしていた教会にしばしば、訪問していた時でした。そこに、ある国から来ている一人の女性がいました。牧師さんに相談があったようです。その夫婦はクリスチャンのようですが、礼拝にはあまり来ません。日曜日にも仕事を入れています。そして、お金がないという相談だったそうです。けれども、同じ国から来ているまた別の夫婦がいます。私たちもよく知っている方々です。その家族の所得は牧師さん、知っているのですが、先ほど相談に来た女性の夫婦よりも、ずっと低いそうです。けれども、教会の礼拝は毎週来ますし、いろいろな奉仕をしています。生活の経済的な水準を落としていても、それで満足する生活を営んでいるんですね。そして、主のみこころだと確信していることを自由にできています。

<sup>14</sup> それにしても、あなたがたは、よく私と苦難を分け合ってくれました。

ここですね、パウロが見ていること、注目しているのは、実はその物質的な支援そのものではなかったのです。そこではなく「よく私と苦難を分け合ってくれました」ということです。献げるということをする、神が介入してくださるのです。神は、与える神だからです。御子をさえ惜しまない方なのです。ですから、人が献げる時に神も、そこにおられて、いろいろな霊的な満たしを与えてくださいます。その一つが、交わりです。「よく私と苦難を分け合ってくれました」と言っています。苦難を分け合ったのです。彼らの間に、愛し慕う兄弟愛がありました。強い結びつきがありました。これは、何にも代えがたいものです。献げるということによって、神は私たちの中に、深い愛情に支えられた交わりをくださるのです。

### 2B 霊的な口座 15-17

<sup>15</sup> ピリピの人たち。あなたがたも知っているとおりに、福音を伝え始めたころ、私がマケドニアを出たときに、物をやり取りして私の働きに関わってくれた教会はあなたがただけで、ほかにはありませんでした。<sup>16</sup> テサロニケにいたときでさえ、あなたがたは私の必要のために、一度ならず二度までも物を送ってくれました。

パウロが話している、福音を伝え始めたというのは、第二次宣教旅行のことです。ピリピの後にテサロニケに行き、それからベレアに行きました。そして逃げるようにして、船に乗って、マケドニアを出てアテネに行きました。その時に既に物のやり取りを、ピリピの人たちはしていたのです。いや、マケドニアを出る前から、テサロニケにいた時に、彼らは二度も物を送ってくれていました。

<sup>17</sup> 私は贈り物を求めているわけではありません。私が求めているのは、あなたがたの霊的な口座に加えられていく実なのです。

神は、福音の働きのため、また他の、みこころとしておられる事柄に支援するということ、そのままだ「霊的な口座に加えられていく実」としておられます。みなさんが、例えばフィリピンにいる宣教師に、その働きの支援をして、そこで多くの人々が救われたとします。そして今、イエス様が戻ってこられたとします。そうしたら、あたかも宣教師の働きで救われた人々のことについて、みなさんがその人々を信仰に導いたかのように、神はみなしておられることに驚くことでしょう。けれども、事実、そうなのです。献げるというよりも、携わるといったほうが分かりやすいでしょう。

### 3B 豊かに満たす神 18-20

<sup>18a</sup> 私はすべての物を受けて、満ちあふれています。エパフロディトからあなたがたの贈り物を受け取って、満ち足りています。

パウロがここで、「すべての物を受けて」というのは、物理的な話をしているわけではありません。その背後にある霊的真相を語っているのです。ヤコブが、エサウと会った時に多くの贈り物をしました。エサウは、「創 33:9 私には十分ある。弟よ、あなたのものは、あなたのものにしておきなさい。」と言いました。エサウは事実、物質的に十分持っていました。けれども、ヤコブはこう言います。「33:11 どうか、兄上のために持参した、この祝いの品をお受け取りください。神が私を恵んでくださったので、私はすべてのものを持っていますから。」ヤコブは、「すべてのものを持っている」と言っています。神が恵んでくださったから、と言っています。この違いは大きいです。彼は、神から恵まれたという信仰がありました。それで、物は持っているのですが、その背後におられる神に触れられているのです。それで、全き充足を得ています。

<sup>18b</sup> それは芳ばしい香りであって、神が喜んで受けてくださるささげ物です。

律法にも書かれている、いけにえの教えですが、パウロの時代にもエルサレムに行けば、神殿でのいけにえが、献げられていました。牛や羊が、全焼のいけにえ、また交わりはいけにえなどによって、祭壇の上で焼かれていたのです。それは、「レビ 1:9【主】への食物のささげ物、芳ばしい香りである。」とあります。主が快く、受け取ってくださっているものなのです。

ですから、パウロは、ここに神を見ているのです。物が彼らのところから自分に渡ったということではなく、神の前に献げられているものなのだということです。教会や宣教団体、慈善団体が苦しうだから、与えないといけなかな？という動機ではいけません。あくまでも、主の前に献げるもの、礼拝そのものなのです。

<sup>19</sup> また、私の神は、キリスト・イエスの栄光のうちにあるご自分の豊かさにしたがって、あなたがたの必要をすべて満たして下さいます。<sup>20</sup> 私たちの父である神に、栄光が世々限りなくありますように。アーメン。

ピリピの人たちが、豊かな中から献げたのではないことは、コリント第二 8 章から分かります。パウロが、エルサレムにいる貧しい兄弟のための献金を異邦人が主体の諸教会で募っていたのですが、マケドニアに着いた時に起こったことを書いています。「8:1-5 さて、兄弟たち。私たちは、マケドニアの諸教会に与えられた神の恵みを、あなたがたに知らせようと思います。2 彼らの満ちあふれる喜びと極度の貧しさは、苦しみによる激しい試練の中にあってもあふれ出て、惜しみなく施す富となりました。3 私は証します。彼らは自ら進んで、力に応じて、また力以上に献げ、4 聖徒たちを支える奉仕の恵みにあずかりたいと、大変な熱意をもって私たちに懇願しました。5 そして、私たちの期待以上に、神のみこころにしたがって、まず自分自身を主に献げ、私たちにも委ねてくれました。」

19 節は、「何でもできる」と言ったパウロの言葉と同じように、しばしば文脈を外して使われますね。自分自身のためにお金を使い果たして、それでも必要は満たされるとか、濫用されています。けれども、そうではなく、主に献げたとしても、それで事欠くことは決してない、ということです。エリヤが、シドンに行って、そこにいた貧しいやもめの話が典型的ですね。彼女は息子と共に、最後のパンを焼いたら、それで死のうと思っていました。けれども、エリヤは、最後の粉と油で自分にパンを焼きなさいと言いました。なぜなら、かめの粉も尽きず、壺の油もなくなるからです。(I 列王 17 章)このようにして、神が献げるということについて、深く介入しておられることが分かります。

そして、献げることによって、父なる神に栄光が帰されます。必要が次々と満たされる姿を、私たちは見ていくことになるからです。

### **3A 聖徒たちの挨拶 21-23**

<sup>21</sup> キリスト・イエスにある聖徒の一人ひとりに、よろしく伝えてください。私と一緒にいる兄弟たちが、あなたがたによろしくと言っています。<sup>22</sup> すべての聖徒たち、特にカエサル家に属する人たちが、よろしくと言っています。<sup>23</sup> 主イエス・キリストの恵みが、あなたがたの霊とともにありますように。

最後の挨拶です。ここにも、パウロの、大きく広がったキリストの思いが反映されています。「キリスト・イエスにある聖徒の一人ひとりに」と言っていますね。特定の人たちではないのです。一人として漏れることのない広がりを持っています。そして、ローマにいる人々のほうも、「すべての聖徒たち」ということです。キリストの内にいる者であれば、すべてが聖徒であり、彼らがピリピの人たちに挨拶しています。

そして、ここですぐれているのは、「カエサル家に属する人たち」です。最も、福音から遠い人々ではないかと思えます、人間的には。ピリピは植民都市ですから、ローマは身近な存在であり、退役軍人たちが住んでいますから、身近ではあります。だからこそ、イエスを信じるということは、ローマに忠誠を誓っているのですから程遠く感じていたことでしょう。その彼らが救われているのです。その彼らから挨拶が来っています。これが、恵みといわずにしてどうなのでしょう？パウロは、だから、こういったところに目を留めて、主にあって喜びなさいと言っているんですね。

主イエス・キリストにある恵みが、あなたがたの霊にありますように、と言って終えています。恵みが彼らの霊にあれば、喜びがあふれ出てきます。そして、私たちの思いも一つになります。



の言葉があるので、教会が背教の中に入って行くから、だから教会全体の動きから離脱しなければいけない、ということなのか？とさえ思いました。しかし、このパウロの言葉に出会いました。背教が起こるのは、パウロ自身が言っていますからその通りです。けれども、私の考えの最も大きな過ちは、自分自身が、主に立っているかどうか？という吟味がないことです。他人のことは裁いていますが、自分自身を裁いていないのです。反キリストの霊は、仲間から離れていくこと、キリストを告白していく者たちから離れていくことです。使徒ヨハネが第一の手紙 2 章でそのことを話しています(18-19 節)。背教を自分自身がしていくかもしれないということ、そういった健全な恐れをもって、主が来られることを待ち望むのです。そうすれば、自ずとへりくだることができます。

1;「ですから」

つながりは、1:27-30。御国の市民として生活しなさい、という勧め。そこで、福音の信仰のために、霊を一つにして堅く立つことを勧めた。今、3 章の終わりで、私たちの国籍は天にあるとして、御国の市民として生きることを勧めたので、戻っている。

3;「真の協力者」二人のオリジナルの女性の働き人が対立していただけでなく、その二人に協力的でなかった様子もうかがえる。

4;「いつも喜んでいなさい」主にある喜び。「喜びなさい」選択するもの  
主のなされていることに目を向けることにより、そこにある善を見る。それで喜ぶ。

5;「あなたがたの寛容な心」すでにパウロは、模範を示していた。みことばが宣べ伝えているならば、喜ぶ。

「すべての人に知られる」自分を人に知られるところに置く。

6;「思い煩い」苦しみがあることによって、自分たちがどうなのか？という思い煩いをしている。

「感謝」いつも感謝する

This central focus on God transforms the transaction of giving and receiving among Christians from a human, horizontal exchange to a divine-human, triangular interaction. God initiates giving, empowers givers, supplies gifts, and meets needs. Participating in the activity of God by giving and receiving leads to rejoicing greatly in the Lord.<sup>1</sup>

---

<sup>1</sup> Hansen, G. W. (2009). [\*The Letter to the Philippians\*](#) (p. 306). William B. Eerdmans

18; すべて ヤコブもすべてを受けていると言っている。霊的な満足。神に触れている。